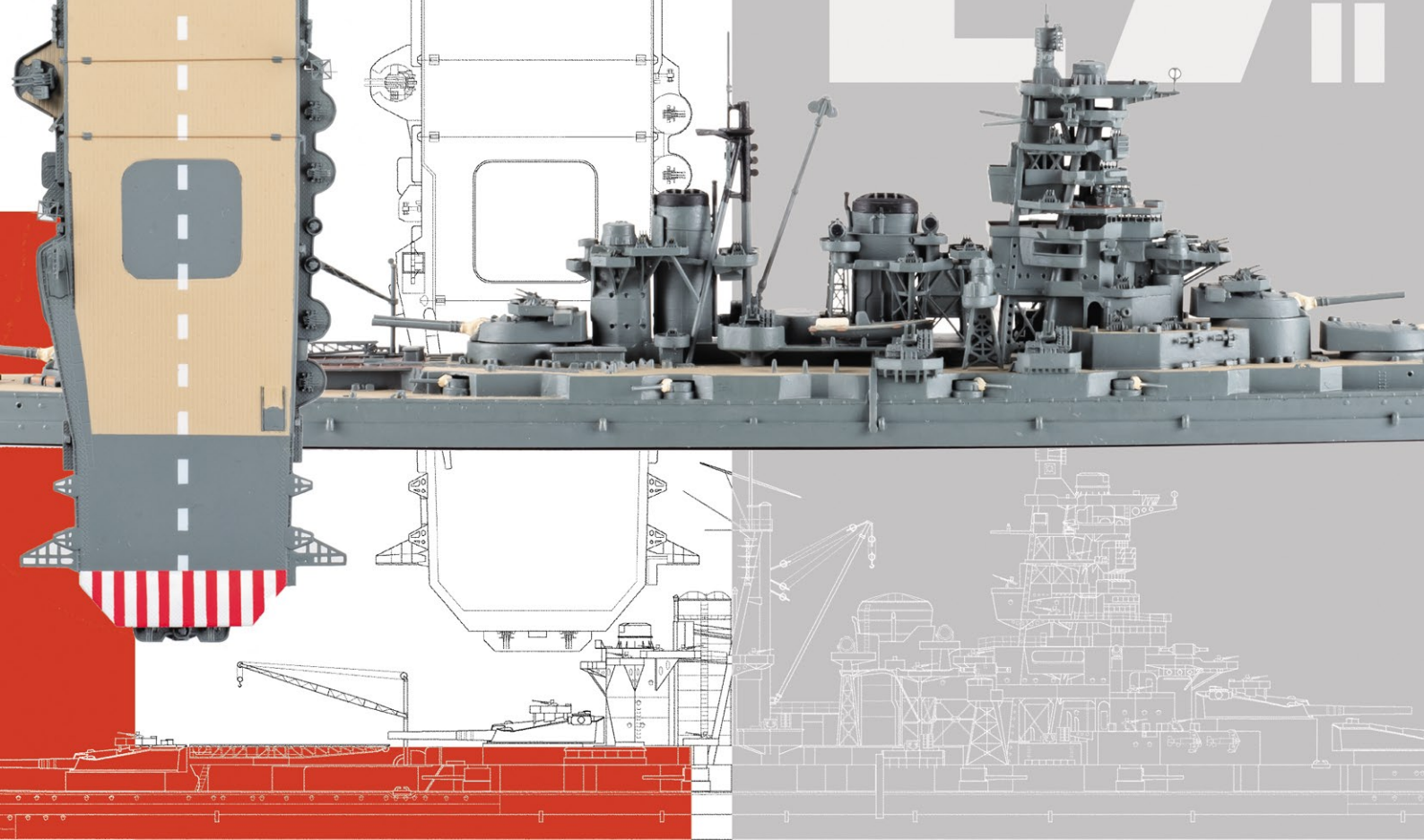


1/700艦船模型 ロジカルモデリング ガイド

LOGICAL MODELING GUIDE FOR
1/700 WARSHIP MODEL

模型製作に役立つ
軍艦考証術

佐藤美夫著
大日本絵画



ロジ

1/700 艦船模型

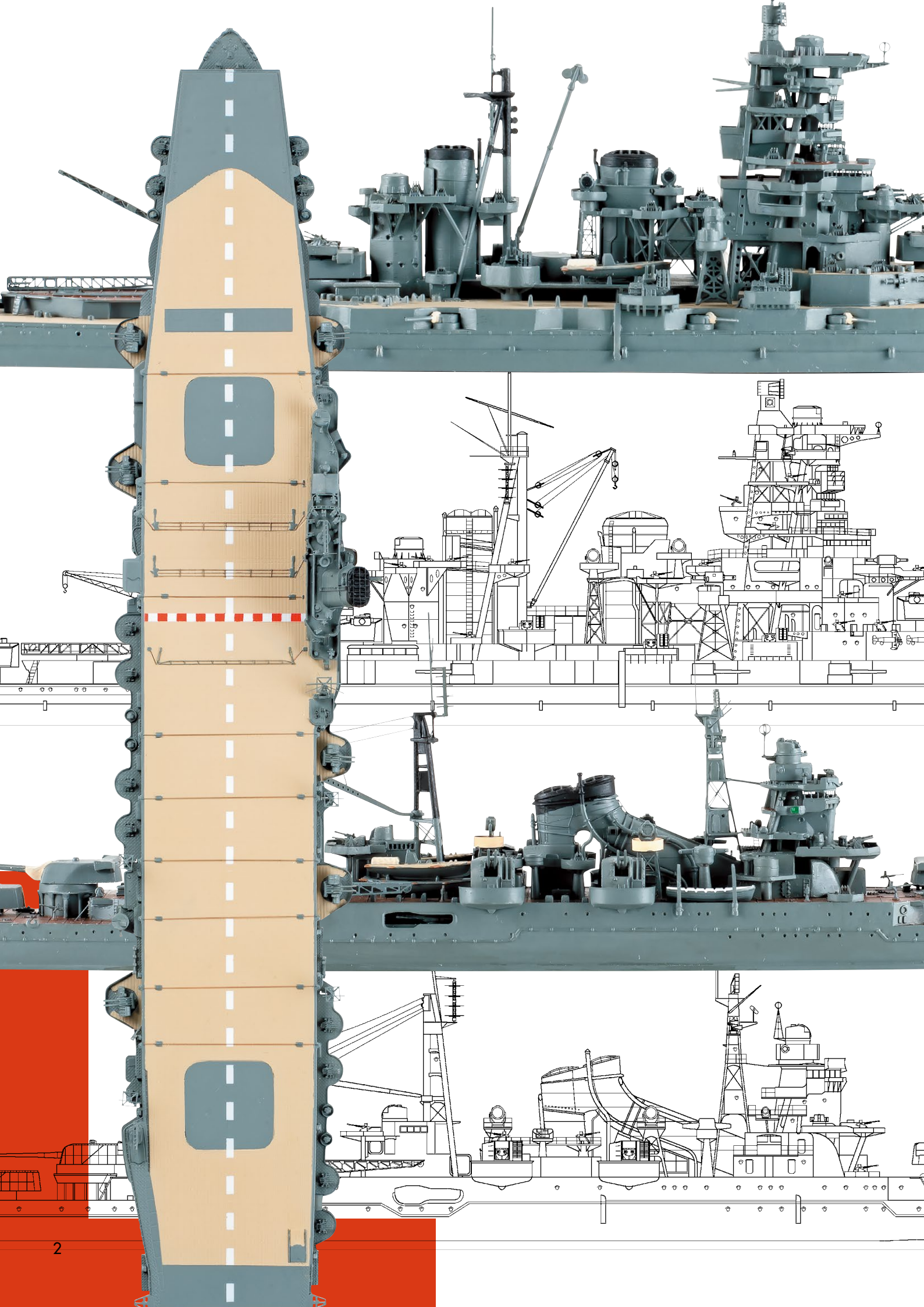
ロジカルモデリング

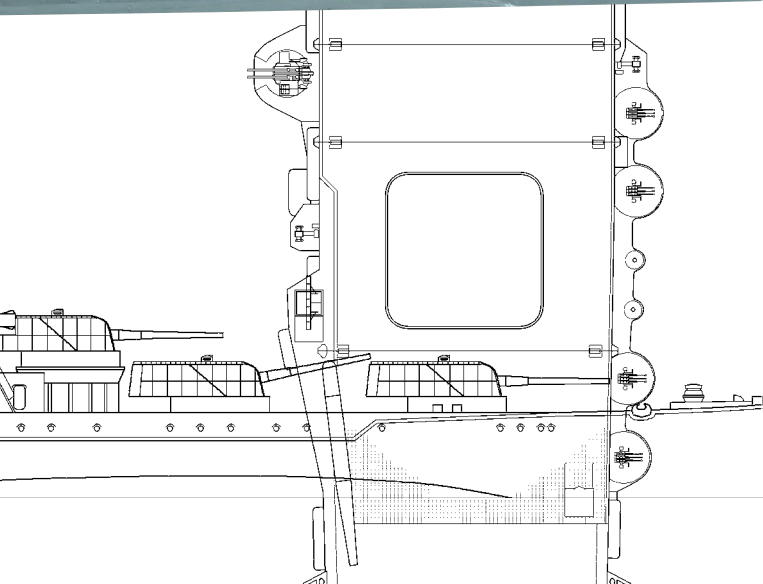
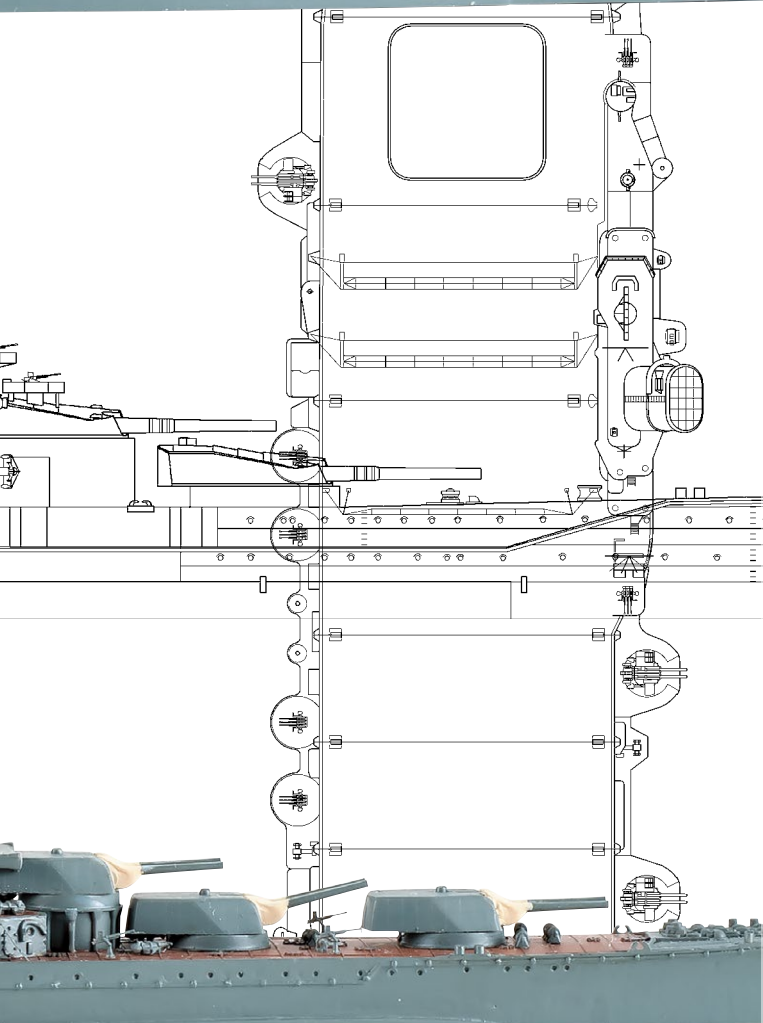
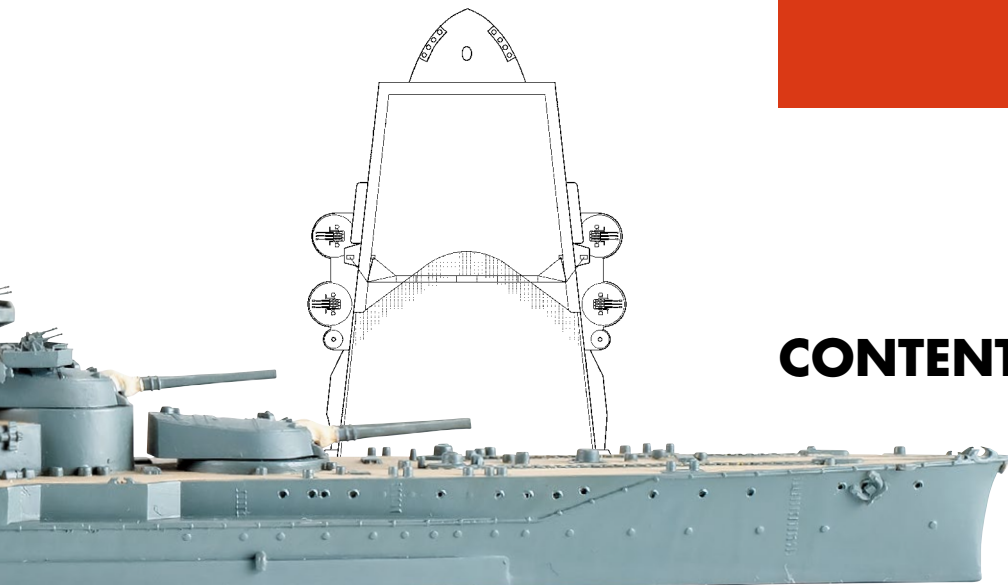
ガイド LOGICAL MODELING GUIDE FOR
1/700 WARSHIP MODEL

模型製作に役立つ

軍艦考証術 佐藤美夫著
大日本絵画

モテ





CONTENT

模型製作に役立つ軍艦考証術

1/700 艦船模型 ロジカルモデリング ガイド LOGICAL MODELING GUIDE FOR 1/700 WARSHIP MODEL

- ごあいさつ..... 4
- chapter01 帝国海軍戦艦 扶桑編 5
 - 1/700艦船模型ではどこまで再現すればいいのでしょうか？
 - 帝国海軍戦艦 扶桑（フルスクラッチビルド1/700）
- chapter02 帝国海軍戦艦 榛名編13
 - 実艦の資料写真ってどういうふうに見ればいいんですか？
 - 帝国海軍戦艦 榛名（フジミ特シリーズ1/700）
- column01 特殊な工具は必要なし.....22
- column02 艦船の寸法と構造.....24
- chapter03 帝国海軍航空母艦 隼鷹編25
 - 隼鷹を作りたいのですがキットと資料が違う……？
 - 帝国海軍航空母艦 隼鷹（フジミ特シリーズ1/700）
- column03 艦船模型の塗装色.....32
- chapter04 帝国海軍航空母艦 信濃編33
 - 信濃のように現存する写真がほとんどない艦はどうすれば？
 - 帝国海軍航空母艦 信濃（タミヤ1/700）
- chapter05 帝国海軍重巡洋艦 熊野編39
 - 資料が少ない大戦後期の軍艦を製作するときはどうする？
 - 帝国海軍重巡洋艦 熊野（フジミ特シリーズ1/700）
- chapter06 帝国海軍重巡洋艦 利根編49
 - 利根と筑摩、よく似た同型艦を作り分けたい
 - 帝国海軍重巡洋艦 利根（フジミ特シリーズ1/700）
- chapter07 帝国海軍重巡洋艦 青葉編.....57
 - 大戦後期の姿を撮影した写真がない場合はどうすればいいですか？
 - 帝国海軍重巡洋艦 青葉（ハセガワ1/700）
- column04 日本海軍が装備していた電探は3種類63
- chapter08 帝国海軍軽巡洋艦 阿武隈編65
 - よく似た5500トン級軽巡の見分け方と作り分け方は？
 - 帝国海軍軽巡洋艦 阿武隈（タミヤ1/700）
- column05 リノリウム甲板.....72
- chapter09 帝国海軍軽巡洋艦 阿賀野編73
 - カタバルトってどの艦も同じなんですか？
 - 帝国海軍軽巡洋艦 阿賀野（フジミ特シリーズ1/700）
- column06 カタバルトと艦載機.....80
- chapter10 帝国海軍駆逐艦 秋月型編81
 - 同時代の駆逐艦を作り分けるポイントは？
 - 帝国海軍駆逐艦 涼月／冬月（青島文化教材社1/700）
- chapter11 帝国海軍駆逐艦 松・橘型編87
 - 戦時量産型船体の特徴を教えてください
 - 帝国海軍駆逐艦 竹／初桜（ヤマシタホビー 1/700）
- 付録図面.....93



実艦の資料写真ってどういうふうに見ればいいんですか？

chapter 02

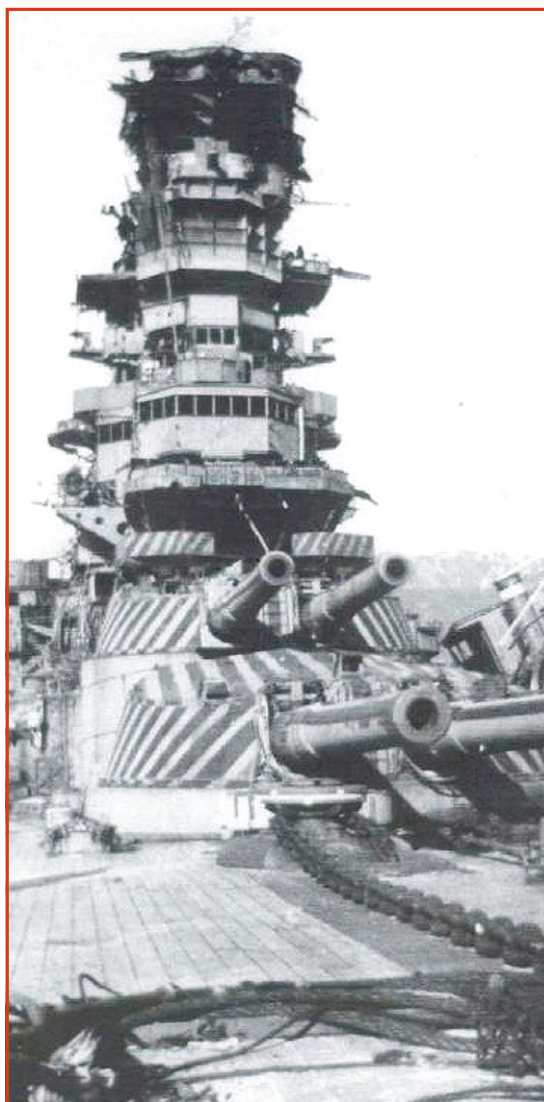
帝国海軍戦艦

榛名編

この章では実艦写真の見方の一例を取り上げよう。これまで何度も見ていた実艦写真をあらためて見つめてみるとそこにこれまで気づかなかった発見がもたらされるケースがある。写真を見る際に邪魔になる先入観をいかに排除して眺めるのか……そこが重要となってくるのだ

帝国海軍戦艦 榛名
フジミ特シリーズ 1/700
インジェクションプラスチックキット
Imperial Japanese Navy Battleship Haruna.
Fujimi 1/700 Injection-plastic kit.

A まず、思い込みを廃して、隅々まで何度も眺めましょう



戦前は軍事物を公表するためにプロのカメラマンによって鮮明な写真は撮られています。機密情報になる部分は消されている場合が多数あります。写真は多くあるので肝心な所が不明となっています。そして開戦後は鮮明な写真は極端になくなります。写真そのものも少なくなっています。戦況悪化の大戦後期の写真はほとんどないでしょう。そのため数少ない写真から情報を得ることになるのです。

実艦写真は見方によって情報が異なってきます。写真は普段からよく見ておくことです。見慣れた写真を見ると、思い込みなどの先入観を持たず常に新しい写真と思って見てみると意外な発見があります。筆者も写真は幾度も見て「こうなってる」と思い込んでいたことがありました。思い込みをなくして再度見ると「あれ？」となるのです。「構造物の位置が違ってる」とか「これは何だ？」と発見につながるのです。

以前、航空母艦の上空写真を見てスポンソンの状態を把握していたとき、見えにくい部分がありました。困っていたとき海面を見ました。海面に影が見えたのです。影でスポンソンの位置が分かったときは「こういうこともある」と思っていました。そのものだけでなく背景でも情報を得られるのです。

艦船の行動を把握しておくことによっても写真の見方が変わってきます。行動とは艦船の出撃やどの場所に居るのか、また改装などの工事を何時どこで行なったのかなどです。

写真の背景情報も重要です。キャプションが書かれている場合この内容を見ておくことです。撮影時期、その場所などです。その時期の艦装を把握するのに撮影時期も重要となります。修正された部分が記載されることもあるのでキャプションも注意して読み込んでおきましょう。

写真から読み解く榛名 一枚の写真からも無数の情報 が読み取れるのだ

着底した最終時の「榛名」。迷彩塗装をされているのが分かる。これは敵機などから発見されぬように施されたもの。艦装ネットなどが張られてた。この写真からもネットを張るためのロープが防空指揮所から垂れ下がっている。この艦橋前面の写真は鮮明なもので見間違いは起こりにくい、このロープがくせ者で不鮮明な写真では柱などの構造物に見えてしまうこともある。錨鎖などの艦首の甲板構造物もよく分かり、主

砲上の機銃台座の形状なども確認できる。大型造風装置が戦闘艦橋を覆うように前面いっぱいには拡張されている。その後は、測所に機銃が増設され拡張された機銃座の形が見取れる。艦橋前の機銃座の奥に軽め穴の空いた三角板が見える。その上には60cm(?)探照灯がある。筆者がこの写真を見て最初に驚いた光景だ。なぜここに。下部見張り所階層の物を移設したのだろうか。

広島県の江田島付近の海域では残存した艦船を敵から守るために迷彩塗装や艦装ネット、樹木などを使用して、艦船を「島」に艦装していました。島に見せるとすると、迷彩色は緑や茶色だったのでしょか。戦艦「榛名」の主砲塔のシマシマ模様は何を表現したのでしょうか。「伊勢」などは上空写真をみると島の砂浜を艦装ネットで表現しているように見えます。しかし、そ

れ程効果が無かったようで米軍の攻撃を受けて大破し着底しています。着底した艦船は終戦後、英国や米国によってその状況を撮影されています。上の写真もその一枚です。こういった残存資料が艦船の研究や、模型製作に必要としているのも確かです。

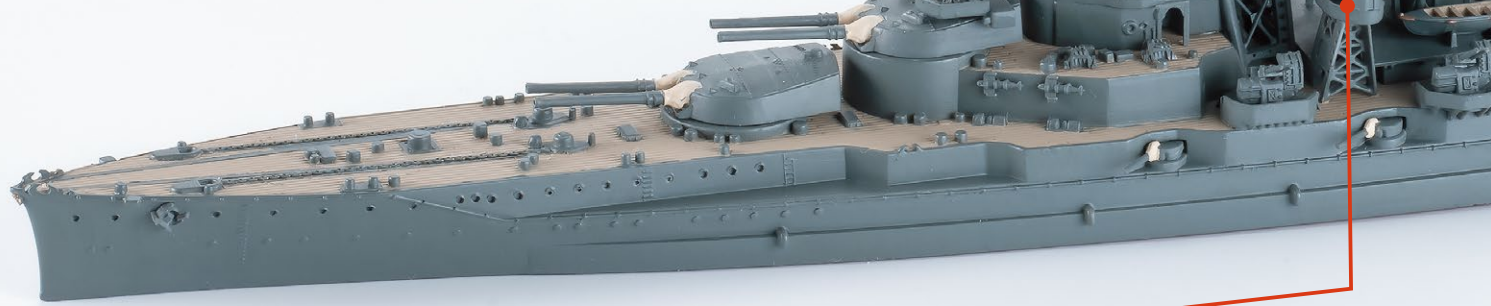
終戦時の迷彩と最後の姿は？



フジミから発売された2種類の「榛名」

フジミ特シリーズ「日本海軍戦艦 榛名 1944」は2008年に発売された同じくフジミ特シリーズの「日本海軍高速戦艦 金剛 1944年10月」に続き2009年発売されています。当時は細密なモデルで「ここまでするか」とかなりの高評価でした。インジェクションプラスチェックキットのパーツとしては機銃も小さく成型され他のキットに流用しなくなるくらいでした。艦橋は「榛名」の特徴をよく捉えており「やっと榛名に出会えた」と

思ったものです。ただ前部煙突周辺の構造物が従来のままの解釈なのが残念でした。その後発売された艦NEXTシリーズは特シリーズの良いところを踏襲して検証面で改良がなされたキットとなっています。こちらは1944年2月出図の公式図の一般艦装図を取り入れて改善されています。スナップフィットの構造上、特シリーズでトラスが抜けていたパーツが抜けてないものになったのが嬉しいところです。



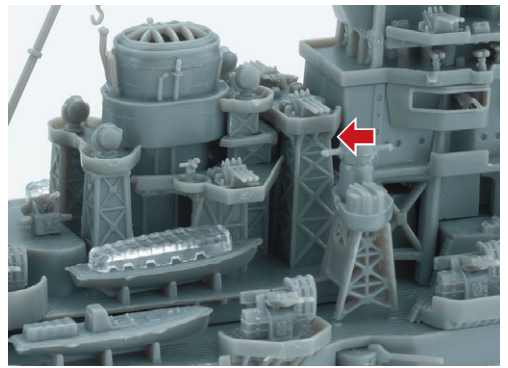
フジミ 1/700

煙突周囲のトラス構造を解析し 実艦の形状にあわせて修正する

従来は1番、2番探照灯台が個別鉄塔とされてきましたが、第1煙突周辺のトラス構造物は1944年2月出図の公式図の一般艦装側面図を見ると「金剛」「霧島」と同じく、ひとつのトラス構造上に1番、2番探照灯台があります。1935年ごろの「榛名」は1番、2番探照灯台が個別鉄塔になっていないようです。1番、2番探照灯台が個別鉄塔とされた理由はわかりません。25mm連装機銃が設置されたところに公式図のような構成になったと思われます。この状態の「榛名」の実艦写真はスターリング湾で撮影されたものがありますが、これは不鮮明なのでかろうじて見える程度のもので、しかしこの不鮮明な写真からでも1935年ごろの「榛名」とは違う部分が見えます。機銃座らしい部分がそれまでと比較して高くなっています。煙突前部に3番、4番探照灯台も見えます。シルエットとして見ると公式図に近いように見えます。フジミ特シリーズの「榛名」は1番、2番探照灯台が個別鉄塔になっていて、機銃座が低い位置にあります。1935年ごろの昆式40mm連装機銃座とほぼ同じ位置と思われる。各探照灯の高さは公式図と同じです。マリアナ沖海戦仕様「日本海軍戦艦 榛名 1944」、レイテ沖海戦仕様「日本海軍高速戦艦 榛名 昭和19年(捷一号作戦)」両キット共に同じです。また特シリーズのキットでは1番、2番探照灯台は25mm3連装機銃を設置するには台座が小さいと思われる。艦NEXTシリーズの「日本海軍戦艦 榛名 昭和19年/捷一号作戦」は1944年2月出図の公式図の一般艦装側面図と同じ構成で実艦と同じと思われます。1番、2番探照灯台の台座が特シリーズと異なり拡張され25mm3連装機銃が設置されています。トラスが抜けたパーツであれば最良なのですがスナップフィットの構造とするには難しいのかもしれませんが。特シリーズ、艦NEXTシリーズの機銃台座などの平面形状は公式図とほぼ同一になっています。古い資料においても平面形状は公式図と同じなので平面形状の差がないものと思われる。探照灯、機銃、機銃指揮所の平面配置も差はありません。

▶1番、2番探照灯台(キットでは探照灯が降ろされ25mm三連装機銃が置かれている。矢印の部分)が個別鉄塔となっており、その隣の機銃座も低い位置になっている。1935年頃の昆式40mm連装機銃座とほぼ同じ位置。機銃座の前面に兵員待機所があり、その上に3番、4番探照灯台のトラス構造が乗っている構造になっている。

フジミ
特



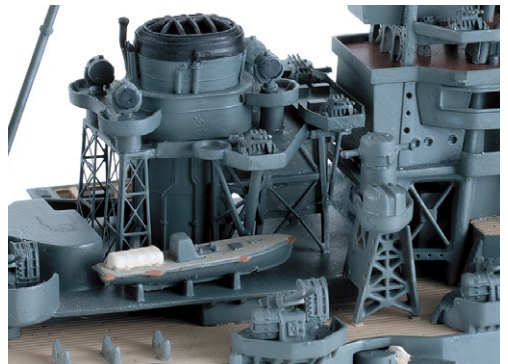
▶1944年2月出図の公式図の一般艦装側面図と同じ構成。実艦と同じと思ってよいだろう。1番、2番探照灯台は、台座が拡張され25mm3連装機銃が設置されている。トラスのモールドは特シリーズに比べ浅くなっているように見える。

フジミ
艦NEXT

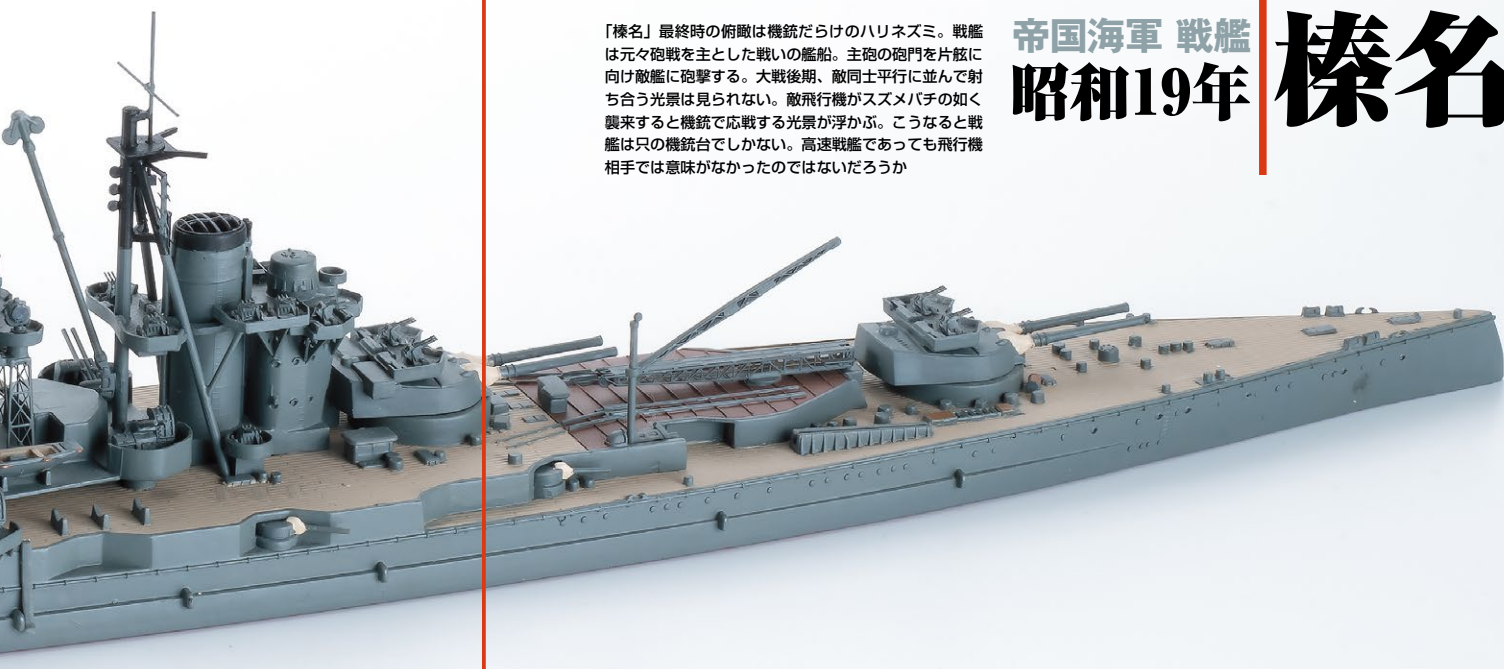


▶1944年2月出図の公式図の一般艦装側面図を参考にプラ角棒でトラス部分を作り兵員待機室はプラ板でトラスを塞ぐように作り付けた。機銃台座及び各探照灯台座はキットパーツを使用した。5番、6番探照灯台のトラスはエッチングパーツ。

作例

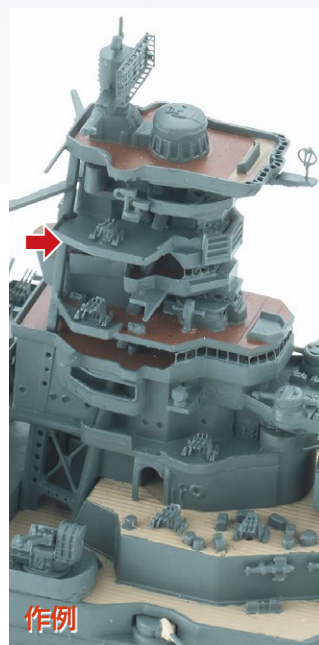


「榛名」最終時の俯瞰は機銃だらけのハリネズミ。戦艦は元々砲戦を主とした戦いの艦船。主砲の砲門を片舷に向け敵艦に砲撃する。大戦後期、敵同士平行に並んで射ち合う光景は見られない。敵飛行機がスズメバチの如く襲来すると機銃で応戦する光景が浮かぶ。こうなると戦艦は只の機銃台でしかない。高速戦艦であっても飛行機相手では意味がなかったのではないだろうか



キットの艦橋の形状と作例での修正点

「榛名」のレイテ沖海戦時は測的所までに25mm連装機銃が設置されています。これほど高い位置に機銃が設置されたのは「榛名」だけと思われます。この時期の特徴としては測的所両舷のフラットが拡張されていることでしょうか。特シリーズでは戦闘艦橋の窓下の遮風装置は1944年6月以前のままで。両舷の上空観測所も拡張されていません。艦NEXTシリーズはこれらが修正されています。共通して測的所両舷のフラットが拡張されていません。作例は測的所の両舷（矢印の部分）をP13の写真を参考に拡張しています。艦橋トップの二号電探をエッチングパーツに置き換える場合には注意が必要です。多くのエッチングパーツは箱状に組み立てるように指示がありますが、これは誤りで実物は前面に格子はありませんので切り取るようにします。



キットは2009年に発売された特シリーズ「日本海軍戦艦 榛名 1944」です。マリアナ沖海戦時を再現しています。レイテ沖海戦時「榛名」を製作する場合は2019年発売の艦NEXTシリーズ「日本海軍戦艦榛名 昭和19年/捷一号作戦」をお奨めします。以降述べる修正が全て網羅されています。手持ちのキットが特シリーズ「日本海軍戦艦 榛名 1944」であり、このキットを活かしてレイテ沖海戦時の「榛名」を製作するにはどうすればよいのかをテーマとして製作しました。2018年に発売された特シリーズ「日本海軍高速戦艦 榛名 昭和19年（捷一号作戦）」を使用する場合も同じ修正が必要ですので参考してください。

船体は2008年発売の「日本海軍高速戦艦 金剛 1944年10月」と同じものです。「榛名」の船体とは異なる部分がありますので修正します。艦底板と船体は接着後、艦首および艦尾の周辺を滑らかにします。甲板パーツは「榛名」になっているのでキットのままに削り取る作業はありません。甲板パーツを船体に貼り付ける前に15番、16番副砲の砲台パーツH12の取り付けを忘れないようにします。筆者は付け忘れてしまい後から副

砲の入る場所から押し込める作業となりました。H12を削って逆さにすると取り付けやすくなりました。

キットではケースメイト部分の開口部が金型の都合で台形になっています。開口部の縁（壁面の折れ曲がり位置）にデザインナイフで垂直にスジ目を入れて少しずつ削り垂直に見えるようにします。一気に削らないように注意してください。菊花紋章取り付け板は「榛名」には艦首先端にありません。取り付け板は削り取りますがフェアリーダーまで誤って削り取らないようにします。簡易な工作なのでステムラインが崩れてしましますが良しとします。アンカーは「日本海軍高速戦艦 金剛 1944年10月」と同様にパーツが小さいのでピットロード新WWII日本海軍艦船装備セット [1] NE-01Rに収録されているパーツに換えています。錨鎖のモールドはあっさりしているのでエッチングパーツにしました。

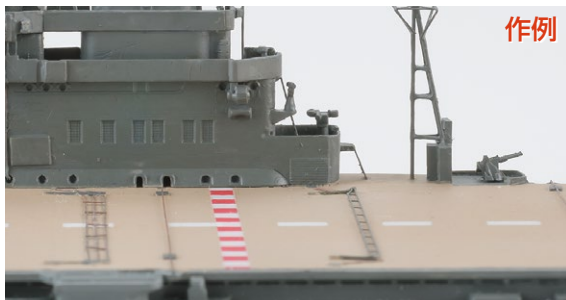
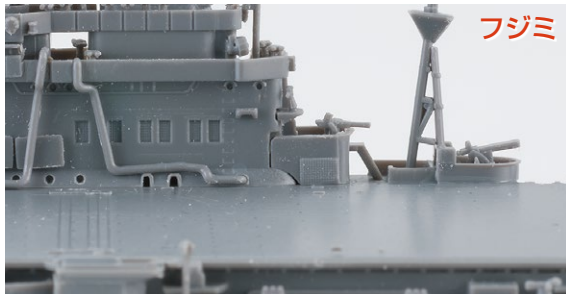
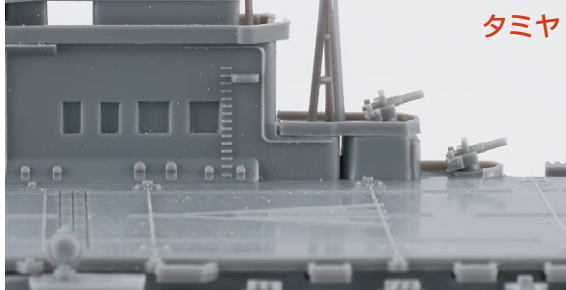
艦橋の組み立ては基本的に説明書に従って行ないます。シェルター甲板（艦橋甲板）は船体甲板と一体成型です。甲板上室と指令塔のパーツ（I33、I34）はとくに改造はありません。筋交いを0.3mm プラ角棒に換え、背面は横桁と筋交いを追加加工

しました。羅針艦橋上部の下部見張所甲板（I20）は対空兵装強化時に見張り所が改装されているのですがキットは改装されていない状態なのでプラ板で拡張します。後部の作戦室は拡張されています。着底した最終時の「榛名」の写真では後部に張り出した部分が大きくなっているのが確認できます。戦闘艦橋（I14）までは説明書どおりに組み立てます。この戦闘艦橋の遮風装置も大きく改装されています。作例はプラ板で作り付けました。測的所（I11）は25mm連装機銃設置のため両舷のフラットが拡張されています。P18～19の掲載図を参考に修正します。前部に取り付ける大型遮風装置（I24）もマリアナ沖海戦時より横幅が拡張されて戦闘艦橋前面の横幅と同じになっていますが、作例はキットパーツのままです。副砲指揮所（I15）には二号電探が両舷につきますので張り出しをプラ板で作り付け二号電探を取り付けます。前部の上部見張り所の形状が異なりますのでプラ板で修正しました。防空指揮所（I10）はそのまま取り付けます。各艦橋の窓は全てエッチングパーツにしています。

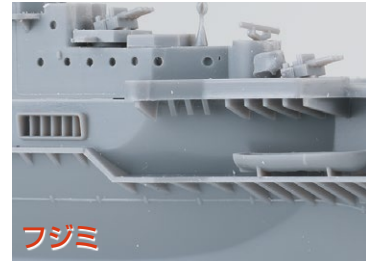
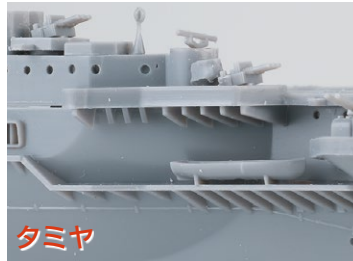
中央構造物は基本的にキットのまま製作します。

飛行甲板側から見た艦橋付近と信号檣

艦橋後部の内部は煙路となっています。放熱口の表現がタミヤとフジミで異なっています。実艦は同じ大きさの放熱口が6カ所あるので、フジミの状態が正解となります。信号檣はタミヤが最終形で、フジミがマリアナ沖海戦時となります。マリアナ沖海戦時の信号檣の基部の構造が不明です。信号所として天蓋に機銃座の無い最終時に近い構造かも知れません。支柱基部には機銃通信機が設置されています。



フジミのキットには黒板が別パーツとなっている。大ぶりなので作例では0.14厚mmプラシートの換えた。またキットには非常時対応の伝声管までパーツ化されているが、通常は無いので取り付けていない。信号檣は基部は不明なので物入れのような構造物をプラ角材で作し、信号檣支柱後部に機銃通信機を取り付けた。この物入れのような構造物は最終時も同じ位置にある。



タミヤのキットはリブ状の支持板のみで支柱はない。九四式高射装置支筒下部も平坦になっている。フジミのキットは基本的にタミヤと同じだがモールドが薄くほとんど支持構造がないに等しい。スポンソンも飛行甲板面より若干高くなっている。P25の写真を見ても実艦と異なっている。作例では九四式高射装置支筒下部に円錐形の影らみ(矢印の部分)、機銃座には支柱を作り付けた。

艦橋前部の機銃座の下面・九四式高射装置支筒の下部

艦橋前部機銃座の下面です。P25の写真を見ますと、機銃座スポンソンには他のスポンソンと同様な支柱と補強リブがあり、九四式高射装置支筒の下部は円錐形の影らみが見えます。また後部の機銃指揮所の支持構造がよくわかります。この部分はマリアナ沖海戦時も同じ構造と思われます。



タミヤのキットを作る場合は、飛行甲板支柱を左右に各1本追加、アンカーレセスを5mmほど後退させる修正は行ないたい。前部増設機銃スポンソンも下面に支持構造物を作り付け上甲板上に後ろ寄りに取り付けるように改造するとよい。フジミのキットは基本的にはそのままでもよい。前部増設機銃スポンソンは飛行甲板ではなく上甲板上に取り付ける方が収まりがよい。

タミヤとフジミの艦首付近の比較

タミヤのキットはアンカーレセスの位置が前寄りになっています。また飛行甲板支柱が中央に1本と不安定に見えます。前部増設機銃スポンソンは飛行甲板に設置されたようになっていて位置も前寄りになっています。ムアリングパイプもありません。フジミのキットは実艦とほぼ同じで良好です。

窓の防弾板が上に開けられた状態を再現しています。写真で見ると防弾板はリベットで隙間はなく固定されています。キットのような防弾板継ぎ目はほとんど見えません。キットの表現も悪くはないのですが、今回はモールドを削り消して防弾板として0.14厚mmプラシートを貼りました。継ぎ目は表現していません。また窓枠をエッチングパーツに交換して窓の防弾板は省略しました。防空指揮所の遮風装置は0.14厚mmプラシードで作りました。艦橋周囲の艦装はマリアナ沖海戦前の傾斜試験時の状態が基本になっているようです。艦橋前部のテントのようなものでパーツ化しています。写真をよく見るとテントは簡易的なもので梁を渡して屋根のトップとし両舷の手摺に掛けてキャンバスを覆い被せたものでした。作例はエッチング製の手摺を取り付けて紙をキャンバスに見立ててテントにしました。また、非常時対応の伝声管と思われるものまでパーツ化されています。羅針艦橋下部の左舷側に黒板があります。キットは個別にパーツ化しています。少し大ぶりなので作例では0.14厚mmプラシードにしました。傾斜試験時では前側の大きい黒板が一枚でした

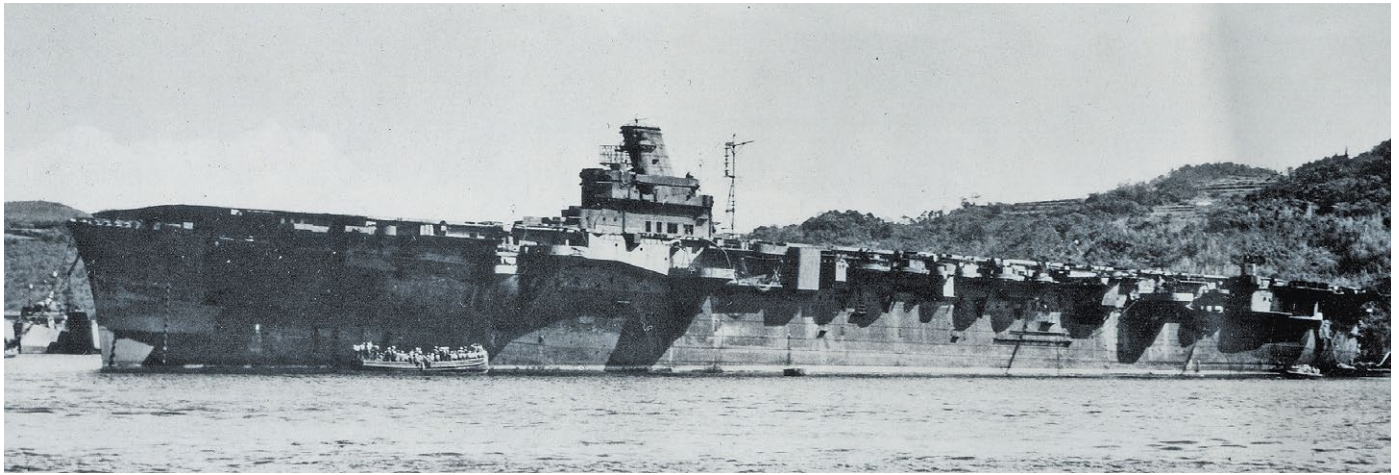
が、マリアナ沖海戦で損傷を受けた様子が写されている写真では小さめの黒板が追加されていました。九四式高射装置の設置される構造物の高さが低いので1mmほど嵩上げています。そのままですとエッチング製の手摺を付けた場合に測距儀が干渉してしまいます。九四式高射装置の支筒は甲板から舷側にはみ出している部分があります。はみ出ている支筒は甲板より下は円錐形になります。機銃座パーツ(Y2)の下面になります。タミヤを含む1/700の飛鷹型のキットはこの部分が再現されていません。P25の写真を見ていただくとその様子が見て取れます。九四式高射装置の支筒の前部に高射指揮用高角双眼鏡のフラットがあります撤去されています。あるいはこれは「飛鷹」のみの構造物かもしれません。

煙突はマリアナ沖海戦で損傷を受ける前の状態で修復後は異なります。飛鷹型の煙突には雨水除去装置が装備されています。「隼鷹」の破損修復後の煙突は雨水除去装置は装備されませんでした。また汽笛と思われるラッパ状の構造物も再設置されていません。作例は雨水除去装置にある通風溝(雨水排水桶とされているが間違いのよう

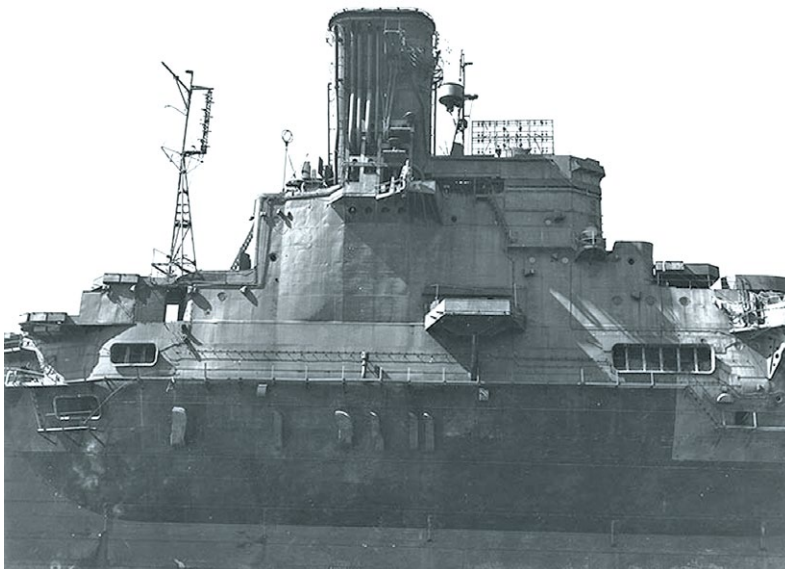
す)を0.3mmプラ角材で煙突周囲を引き回しています。「飛鷹」の消火訓練の写真が参考になります。ラッパ状構造物はキットでは足場(K15)にモールドされていますが実際は足場より上にあります。作例はラッパ状構造物を一端切り取って煙突に取り付けました。またラッパの先端部分は開口しました。煙突支持構造物(V3)は最終時の構造に近いことが傾斜試験時の写真で確認できました。最終時の写真を参考に煙突支持構造物を作り換えました。蒸気捨管は直管は0.4mm径プラ丸棒で、屈曲管は0.4mm径真ちゅう線にしています。トップ格子は0.12mm径銅線で作り付けました。

武装は、八九式12.7cm高角砲をキットパーツ、25mm3連装機銃はファインモールドのナノ・ドレッドパーツにしています。

無線檣はキットパーツ(K1、K2)を使用しています。トップマストを0.3mmプラ丸棒にヤードを0.2mm径真ちゅう線です。信号檣は0.3mmプラ丸棒で製作しました。信号檣の基部の構造が不明です。機銃通信機というもののが設置されています。信号所として天蓋に機銃座のない最終時構造に近いのかも知れません。

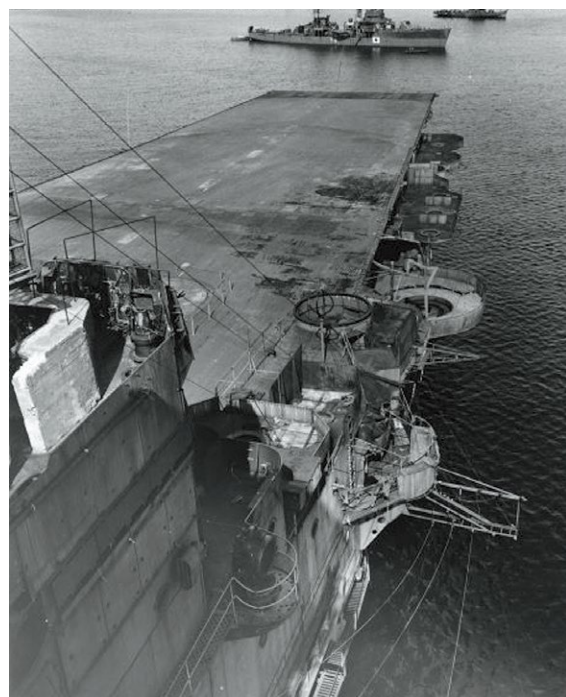


▲昭和20年11月佐世保での写真。昭和19年12月米潜水艦の雷撃に損傷を負う。艦首は修復されるも機関は応急処理のため外洋航行不能であった。佐世保係留のまま終戦を迎える。武装をほとんど外されている。飛行甲板右舷後部には28連装噴進砲が装備された。写真ではそれらしいスポンソンが見える。その前は隠顕式探照灯の格納庫であったが増設21号電探になっている。奥に見える艦橋には21号電探、後部の信号槽には13号電探が設置されている様子が分かる。艦橋下部の黒く四角い部分は缶室通風口。



▲昭和20年10月佐世保での艦橋右舷のクローズアップ写真。最終時の様子が鮮明に分かる写真だ。手前には機銃が撤去された機銃座が見える。竣工時は探照灯が置かれていた。艦橋窓には防弾板が置かれている。羅針艦橋周囲は防弾板により覆われている。艦橋下部にはキャットウォーク（舷外通路）の様子がよく分かる。この写真では見え難いが舷外電路の取り付け具の跡が確認でき、引き返し状態を見ることが出来た。

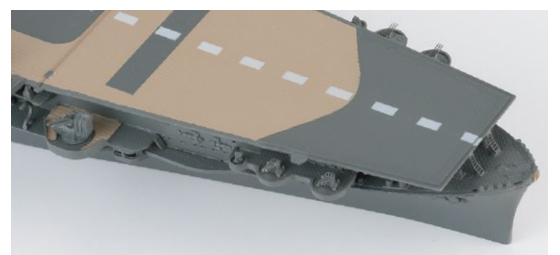
▶信号槽のクローズアップ写真。13号電探の様子が分かる。手前のループアンテナは方向探知用アンテナだ。奥の機銃台座、高角砲スポンソンの様子もよく分かる。飛行甲板上で着艦制動装置の導管装置周辺に木甲板が見られない。昭和19年時の写真では周囲まで木甲板であった。右側後方に21号電探が見える。下部の電探室は角張っている。この21号電探は隠顕式ではなく移動式とされている。



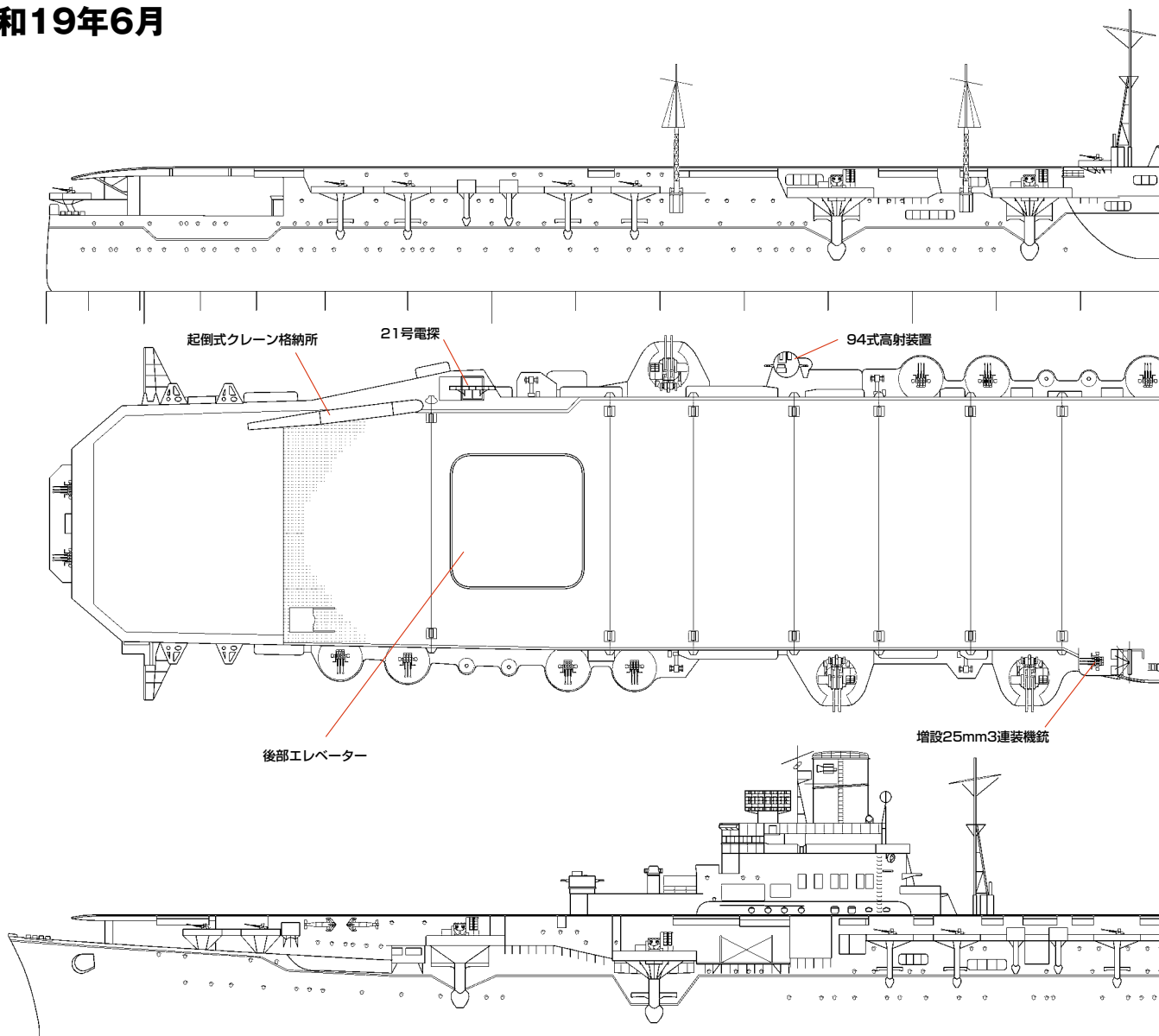
◀飛行甲板艦首方向右舷側の写真だ。左側手前は艦橋上部の防空指揮所が見える各双眼鏡も撤去されたようだ。艦橋前の増設機銃台座が見える。その前の円筒形は94式高射指揮装置の撤去跡だ。高角砲スポンソンの奥に28連装噴進砲のスポンソンが見える。その奥は機銃スポンソンだが25mm3連装機銃ではなく25mm単装機銃に置き換えられた。噴進砲設置のための重量制限によるものらしい。この写真では見え難いのだが飛行甲板上には迷彩塗装がうっすら確認できる。遮風柵の前部周辺をよく見ると斜めに黒い線が描かれている。空母迷彩によく見る「IIIの形」に見えないだろうか。

飛行甲板は「飛鷹」と異なるのか

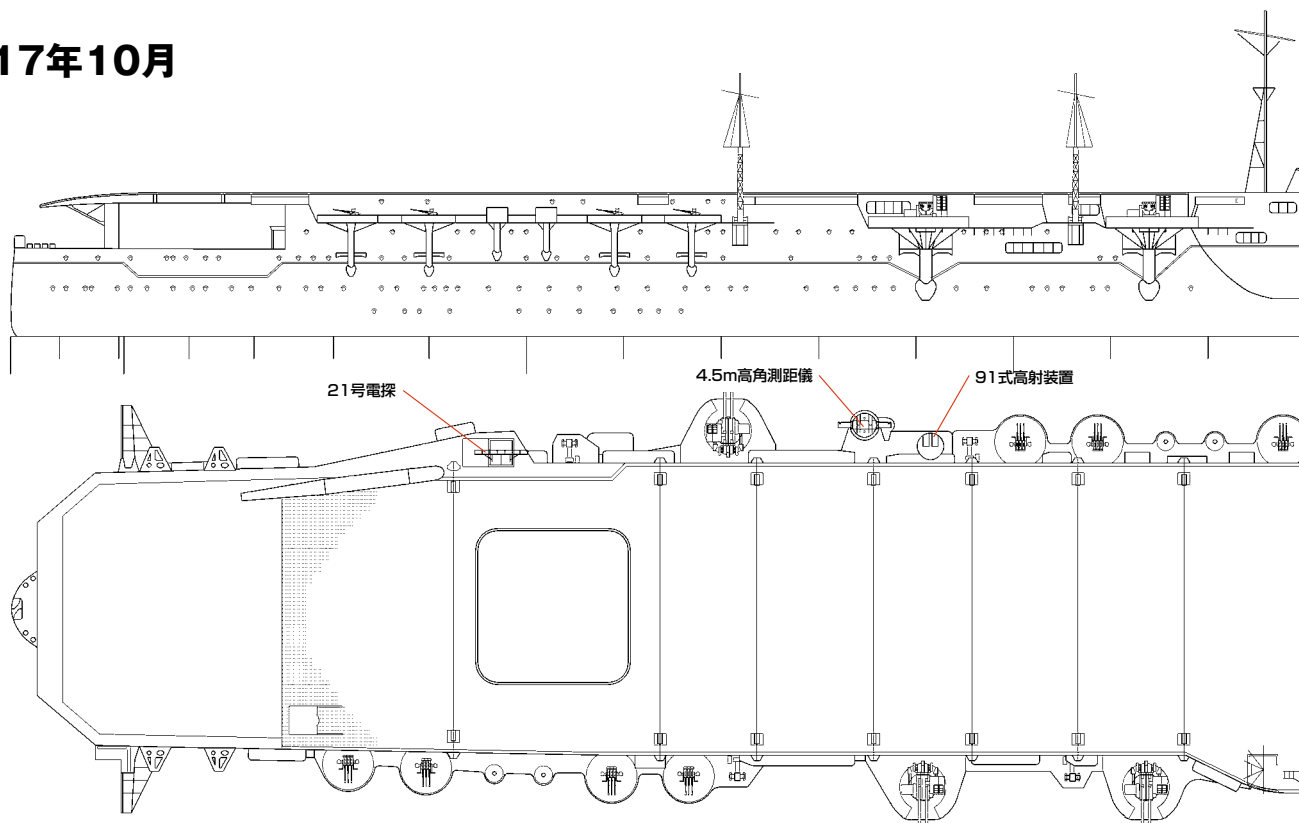
公式図の一般艦装図に飛行機甲板の艦首側が丸みをおびて描かれている。「隼鷹」の写真を見ると角張っている。考証などでお世話になっている藤田高史氏によると丸みのある飛行甲板の写真があり、これが「飛鷹」ではないのかと話されていた。上空より見る「隼鷹」とされる写真は丸みをおびているように見える。「隼鷹」の公式図は1番艦「飛鷹」を元に描かれていてもおかしくない。

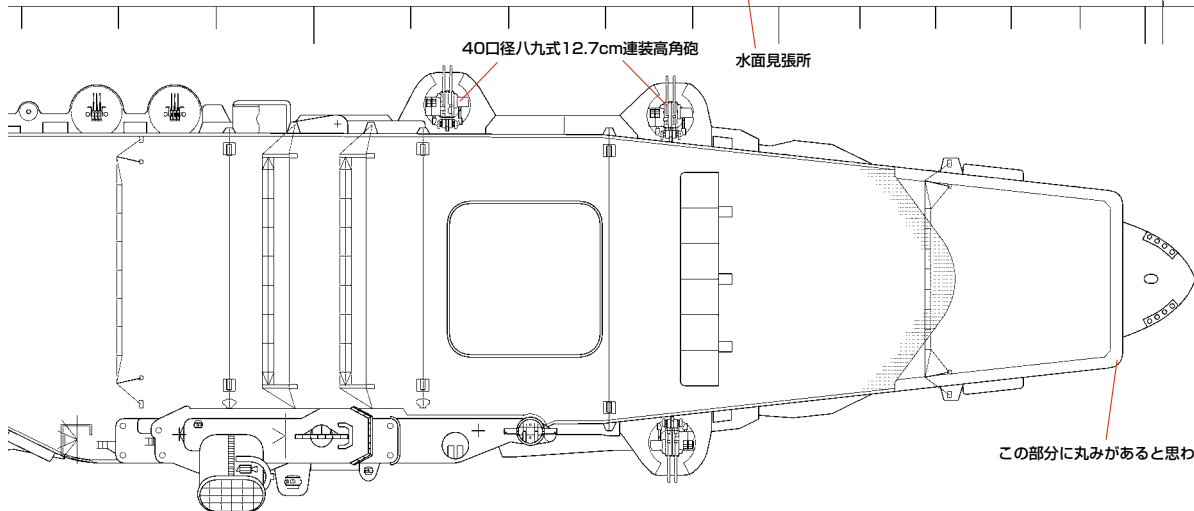
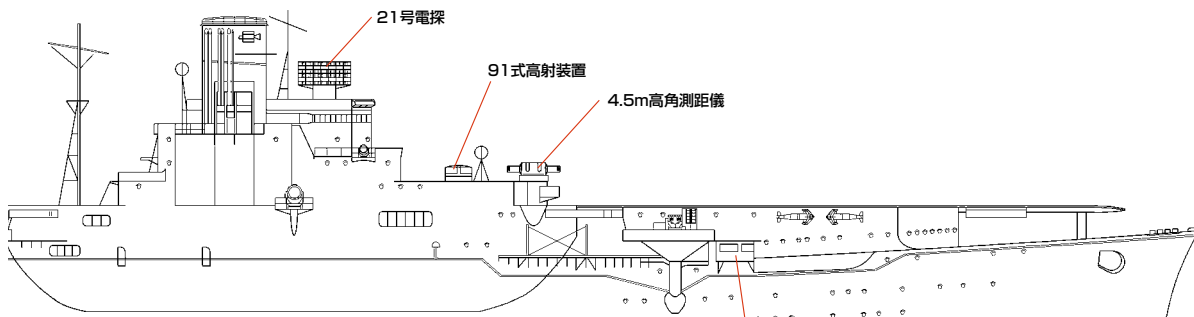
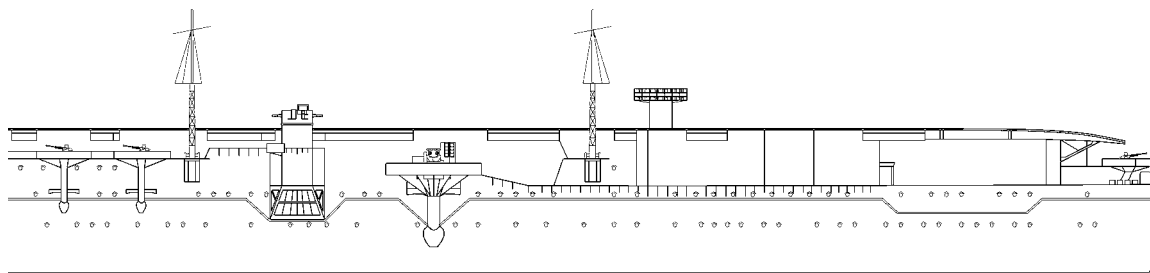
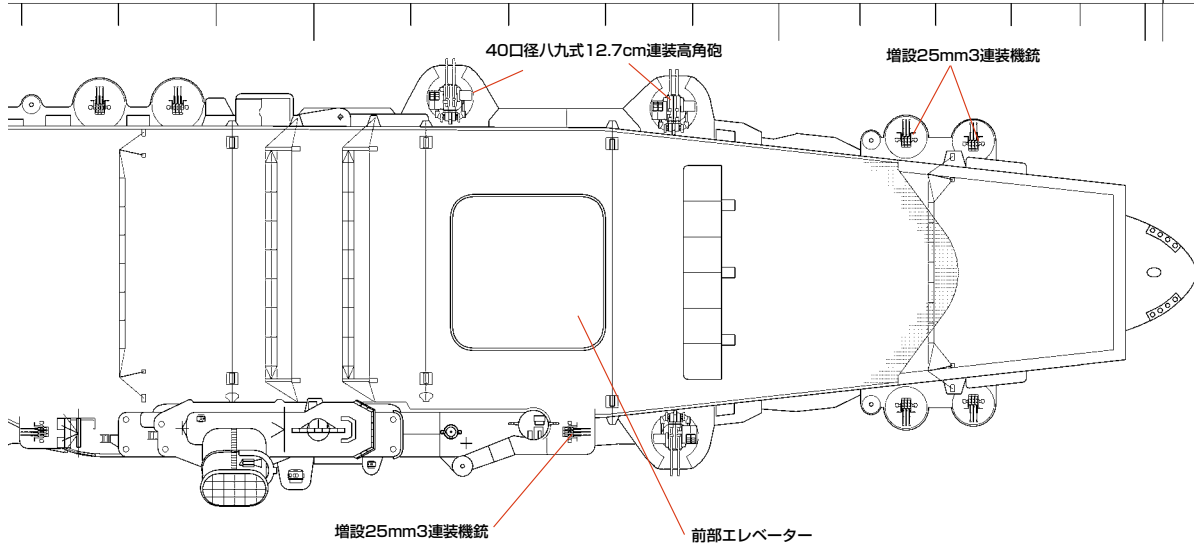
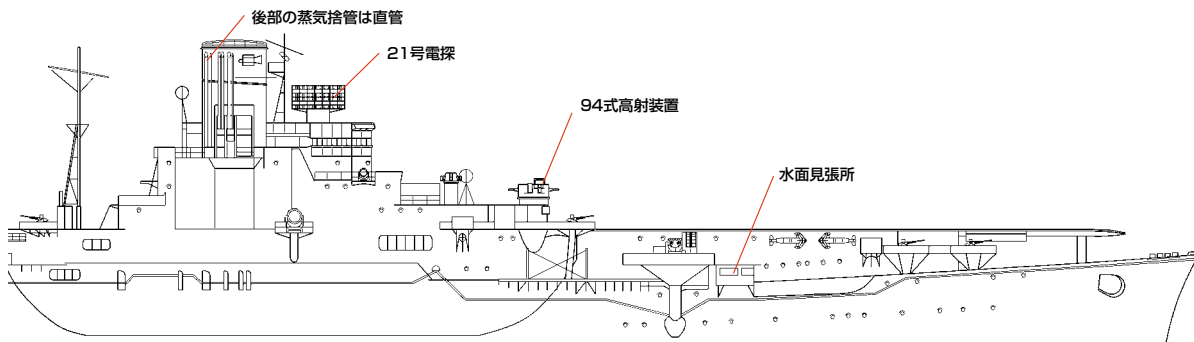


隼鷹 昭和19年6月



飛鷹 昭和17年10月





図は、原書房の「日本海軍艦艇図面集」に収録された公式図の一般艦装図（昭和17年7月完成図）を基にしている。この図には飛行機甲板の艦首側が丸みをおびて描かれている。また、高角砲用高射装置が仮設と思われる4.5m高角測距儀が描かれており、「飛鷹」の図のようにも思える。実際は高射指揮所として九四式高射指揮装置に搭載された。21号電探は昭和17年の竣工直後に艦橋に搭載されている。マリアナ沖海戦前に25mm3連装機銃が艦首側4基（片舷2基）、艦尾に2基、艦橋前後に2基増設された。また移動式25mm単装機銃も装備されていたようだ。実艦写真では昭和19年5月の傾斜試験の写真、マリアナ沖海戦で艦橋に着弾し煙突周辺が破損した時の写真などを参考にしている。煙突は消失しているが他の部分は非常に参考になった。信号マスト基部は写真を見ると何かの構造物がある。これは「機銃通信機」と呼ばれる装置。「準鷹」のフレームNo.の数える方向は艦船がFP（艦首）から始まるのに対し、商船等のAP（艦尾舵輪）より始まる。

「飛鷹」の実艦写真はほとんど無い。図も「準鷹」の写真で判断している。唯一、昭和18年10月の消化器実験中の艦橋周辺の写真がある。「飛鷹」は高角砲射撃装置が九一式高射指揮装置が搭載されたこととある。前述の写真をみると消化剤のカーテンに隠れ解り難いが比較的シールドの大きさが小さく、九四式高射指揮装置の天蓋にある指揮官展望塔が確認できないため4.5m高角測距儀と判断した。「準鷹」の公式図は飛行機甲板の艦首側が丸みをおびている。「準鷹」公式図は「飛鷹」の公式図として見てもよいのではと思う。艦橋前部には高角砲射撃装置は描かれておらず高角測距儀となっている。またその前部には高角双眼鏡が描かれているが実艦の「準鷹」にはないのである。「飛鷹」は九一式高射指揮装置が搭載されたのであろうか、昭和19年には九四式高射指揮装置が設置されたようである。公式図のままを「飛鷹」の図とした。

です。その他はフルスクラッチとなります。作例は全てプラ板で工作しています。プラ板を甲板部分と側面（壁）部分に裁断しそれらを接着し組み立てる方法で製作しています。筒状の主砲射撃指揮所基部の部分のみ積層プラ板から削り出して自作しました。主砲射撃指揮所はコトブキヤのMSGシリーズの丸ノズルパーツに収録の5mm径丸ノズルを使用しました。円盤状のパーツは丸ノズルパーツを加工したほうがプラ板から切り出し

より簡単で正確な円形のものができるので便利です。煙突はキットパーツを使用します。ジャッキステー等のモールドは全て削り取ります。新たにジャッキステーを0.12mm銅線を貼り付け再現しました。飛行機格納庫は艦橋同様にプラ板で作ります。予備主砲射撃指揮所は艦橋トップ同様にコトブキヤの5mm径丸ノズルです。「青葉」の新造時は資料が少なくわからない箇所が多くありますが、あくまで1/700模型のレベル

として製作しています。

格納庫前部の後部シェルター甲板は90cm探照灯台や方位測定所等があります。後部煙突両舷付近に高射指揮装置、その直ぐ後ろに2.5m測距儀があります。主砲はハセガワの「妙高」のキットのもので天蓋に防熱板の切り欠きのないものを流用しました。「青葉」のキットパーツにくらべ小ぶりのように防熱板が施される前の砲塔のイメージが再現できました。

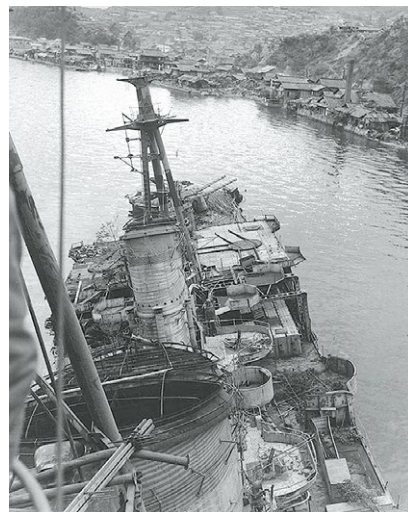


▲昭和20年7月24日の空襲で大破着底した「青葉」。「青葉」の近代改装後の公式図などの資料がほとんどない。着底した「青葉」の写真が唯一の資料といえる。これだけ鮮明な写真であっても疑問な箇所もある。本艦は昭和19年10月のレイテ沖海戦に参加し米潜水艦の雷撃により損傷する。応急措置は実施されたものの機関の

修理は行なわれず、呉に係留された。そのまま昭和20年の空襲を受けることとなった。写真では敵機に対し応戦中であつた痕跡がいくつか見える。応戦もむなしく敵機の爆撃弾が命中し艦尾切断となり着底した。おそらく、この写真を撮影後に播磨造船所呉船渠で解体のための引き上げ作業が行なわれたと思われる。

◀着底した「青葉」の艦橋後部と前檣のクローズアップ写真。主砲射撃指揮装置の測距儀が手前に向いている。2番主砲が左舷に砲口を向け仰角を上げていることから敵機に向けての砲戦中であつたのか。前檣トップに21号電探、その下に22号電探が見える。前檣中段には電探室が積み重なっている。21号電探も手前を向いている。電探で敵機を確認し砲撃に至つたのであろうか。22号電探の上方に信号ヤードの支持ステーが見える。信号ヤードはなくなっているが水平のヤードがあつたことの証となる。

▶煙突周辺の機銃台座、奥の飛行機作業場の様子が覗える。飛行機作業場手前にある次発魚雷格納庫上のスキッドビーム上にある機銃座に搭載された機銃の種類の特定ができない。25mm連装機銃を搭載するには重量的に疑問が残る。手前のは搭載可能のようであるが奥の方は舷側に近い方はどうなのか。スキッドビームの荷重は如何ほどであつたのか。奥の3番主砲も左舷を向いている。左舷からの敵機に対し応戦中であつたようだ。



詳細がわからない青葉の新資料

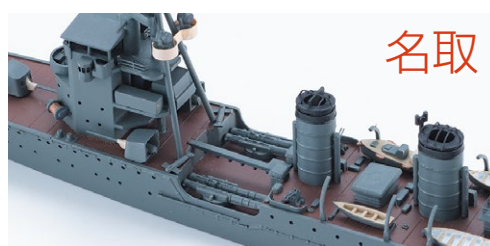
最終時の「青葉」は艦橋を上から見た写真がほとんどなく作図には苦勞しました。内山睦夫氏所有の着底時の俯瞰から見る写真が唯一の参考資料となりました。羅針艦橋天蓋の構造物が分かりにくくブルワークの状態が未だに理解できませんが、煙突周辺（機銃座など）、飛行機作業甲板の作図には充分な情報が得られました。先日発売された内山睦夫氏の大型模型作品集『超精密巨大艦船模型の世界』（大日本絵画）にこの写真が収録されています。この写真は最終時の模型製作に大いに参考になると思います。

雷装が強化された「阿武隈」

「阿武隈」は開戦前に魚雷兵装強化が行なわれました。全ての連装魚雷発射管を撤去し後部発射管を九二式四連装発射管に替えて九三式酸素魚雷を16本搭載していました。前部発射管のウェルデッキは塞がれ兵員室となりました。開戦前に九二式四連装発射管を装備したのは「阿武隈」と「那珂」だけです。「名取」は換装されず従来のままでした。「阿武隈」の魚雷兵装強化は水雷戦隊旗艦として使用するためとされています。

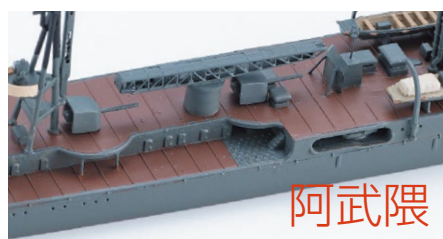
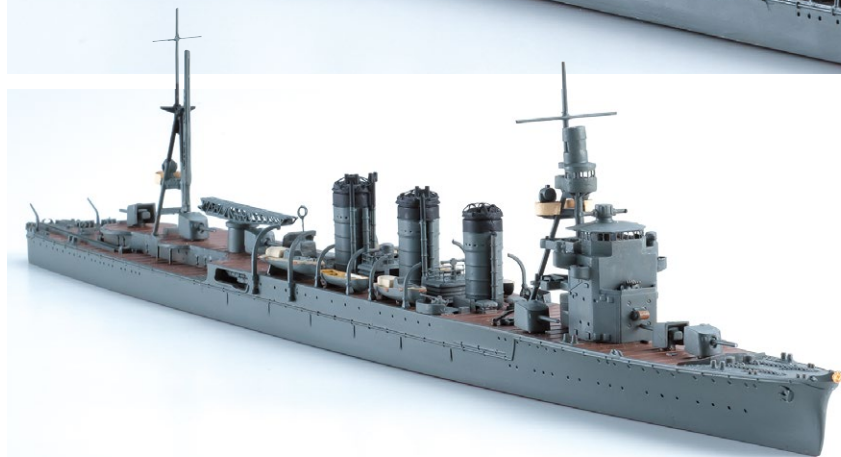
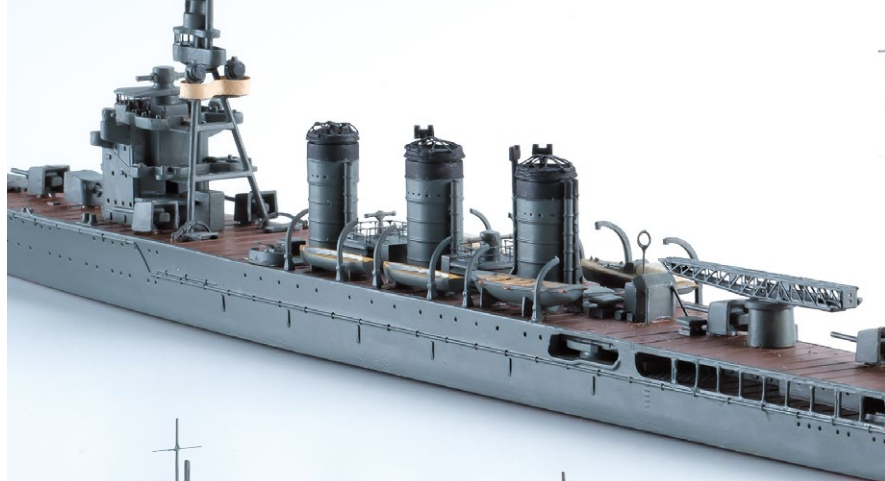


阿武隈

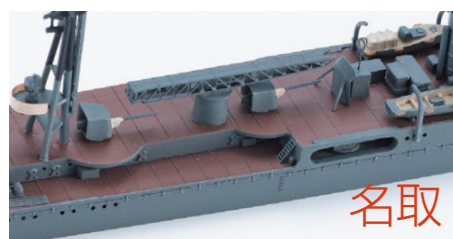


名取

◀ウェルデッキの有無により第一煙突前部の様子が大きく変貌して見える。「阿武隈」はこの甲板には何も置かれていないのでボツカリと空いた印象をうける。後に25mm単装機銃が4基設置された



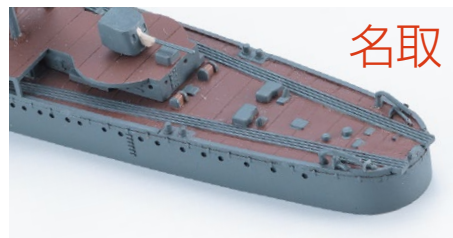
阿武隈



名取



阿武隈



名取

中央部、艦尾の形状

後部シェルター甲板は「阿武隈」と「名取」は長良型でこの2艦のみ左舷側が拡張されています。両艦の後部シェルター甲板艦装はほとんど同じと思われます。後橋は飛行機揚収デリック装備のため三脚橋となりました。デリックはトラス構造です。後橋には110cm探照灯が1基装備されています。カタバルトは呉式2号3型改が搭載されました。「阿武隈」の連繫機雷敷設軌条の撤去時期は不明で作例では開戦時までは残されたとして製作しています。八一式爆雷投射機は65頁の写真で見ると確認できません。八一式爆雷投射機の搭載は不明で5500トン級軽巡で確認されているのは「多摩」と回天搭載艦となった「北上」の公式図のみです。

を使用しています。羅針艦橋 (B33) の甲板下面から前橋ストラットとの間に支持構造物 (リブ) があります。作例はその一部を0.3mmプラ角棒で再現しました。その下の階層の信号所甲板も同様な構造になっています。「阿武隈」は他の長良型と並べて比べると艦橋が小さく見えます。実際は「阿武隈」の大きさが正しいです。「名取」や「鬼怒」は「阿武隈」と比べると下部艦橋の高さが高めで幅が広がっています。これは長良型のキットが球磨型の船体を流用したことにより、球磨型の下部艦橋にかぶせる構造になったためと思われます。「阿武隈」の前橋は大改正によりスッキリした構造になりました。パーツも組み立てやすい構造になっています。探照灯座はブルワークを切り取りコピー用紙にセールカラーで塗装したものを手摺りのキャンバスに見立てて取り付けました。主砲指揮所 (B42) の窓もエッチングパーツにしました。高さがあり窓間隔の狭い「JPE27G 精密窓枠 Ver.A」セットの1.1PSにしました。前橋は組み立てた後に船体に取り付けますが組み上がった前橋は安定してるので取り付けも容易でした。真珠湾攻撃時の「阿武隈」の艦橋が白く塗られて

たと思われる写真がありますが、65頁の写真では白く見えないので作例は通常の軍艦色としました。ストラット後部のパラベン用ダビットはファインモールドのナノドレッドの大型艦用ラジアルダビットセットに収録されたJ字型のダビットを収納状態にして取り付けました。

煙突もそのまま製作します。トップの格子は0.12mm銅線で製作しました。第一煙突は分離板があり格子も前後に分かれています。蒸気捨管や小煙突はそのまま使用しました。正確には蒸気捨管の下部が曲っておりキットのような真っ直ぐなものではありません。また高さも足りないようです。作例は未修正です。

14cm主砲は従来のキットでは砲楯に砲身を取り付けるといったものでしたが本キットでは単装砲に砲楯を付けるという形になり実艦に近いものになりました。一旦組み立ててから砲身を切り取り0.5mm真鍮線を取り付け防水布は省略しました。13mm4連装機銃、25mm連装機銃はファインモールドのナノドレッド・シリーズです。25mm連装機銃には機銃台座をプラ板で製作しました。「鬼怒」(昭和16年) の写真で確認すると台

座があり甲板のリノリウム上に直接置かれてはいません。「阿武隈」も同様と判断しました。台座は0.25mm厚プラ板でブルワークは0.14mmブラシートです。

後橋は前橋同様に組み立てた後に船体に取り付けます。トップマストはヤードのみ真ちゅう線に替えました。探照灯座は前橋の探照灯座同様にキャンバスに見立てました。クレーンはハセガワの金剛純正エッチングパーツ (現在生産休止中) に収録されたものを使用しました。形状が5500トン級軽巡のトラス構造のクレーンアームに近いので使用しています。

カタバルトはファインモールドのエッチングパーツ呉式2号3型を使用しました。エッチングパーツの旋回ポイントで取り付けると位置が前方寄りになるようなので後方に1mmほどずらして取り付けました。

艦載艇は11m内火艇をフジミの余剰装備パーツを流用しました。内火艇はキットパーツに防舷物などのディテールアップを施しました。ポートダビットはキットパーツを使用しました。大型のC17は削って厚みを薄くしています。

ISBN978-4-499-23402-3 C0076 ¥4500E

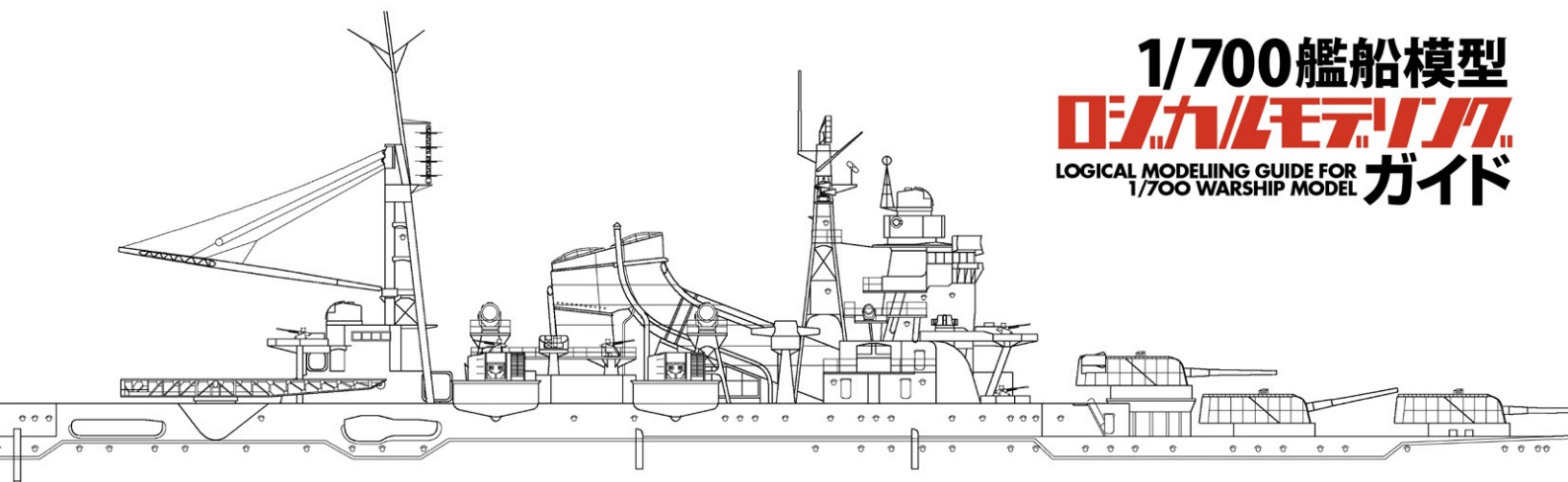
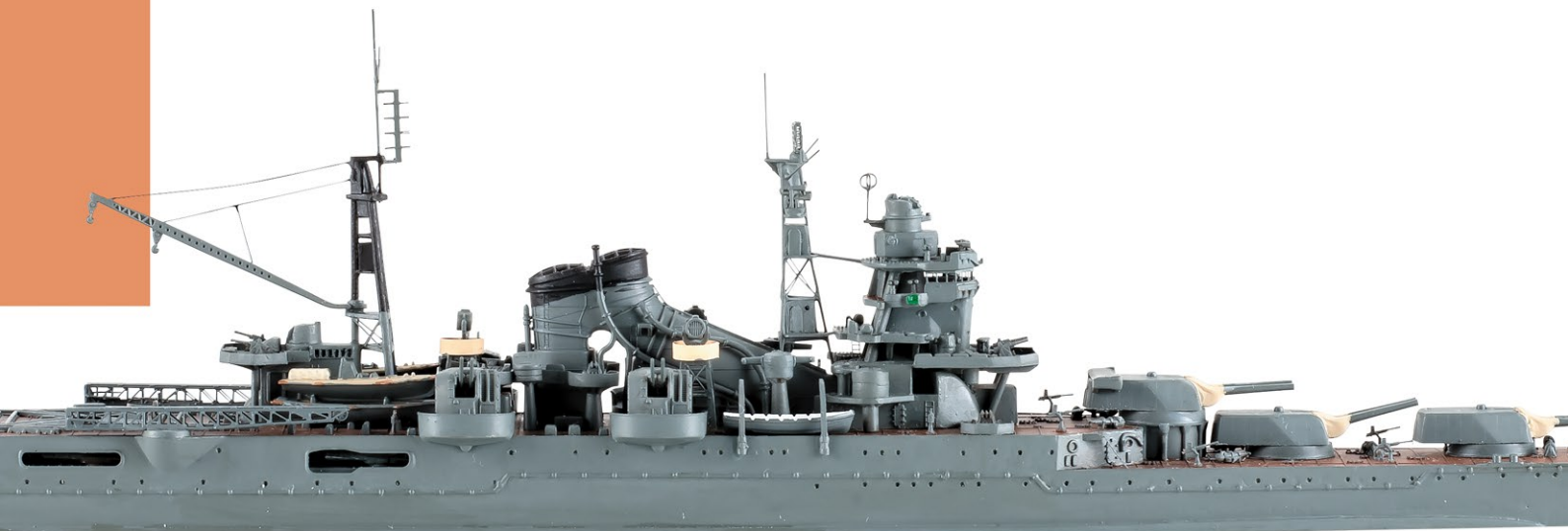


9784499234023

定価(本体4,500円+税)



1920076045004



1/700艦船模型
ロジカルモデリング
LOGICAL MODELING GUIDE FOR
1/700 WARSHIP MODEL **ガイド**

